

長崎の町と筑前・筑後

蒲池 智明

昨年の長崎くんちの踊り町と出し物は、今博多町が本踊、魚の町は川船、玉園町(旧町名は上筑後町)が獅子踊、江戸町はオランダ船、そして籠町が籠踊でした。出し物は和・華・蘭のそろいぶみで国際色がいっぱい。踊り町は五町のうち、今博多町、上筑後町(現町名は玉園町)、江戸町の三町が長崎県外の地名が付けられた町でした。

これらの町名をみると、長崎の町の成立の歴史的な背景を、実によく物語っていると思われます。今博多町と上筑後町の二つの地名は、私の古里八女市と同じ福岡県内にある地名です。

福岡県は旧国名で言うと、福岡市を中心とした北西部が筑前の国で、久留米市や柳川市など南部が筑後の国でした。本稿では長崎と筑前、筑後とのかわりについて、少々ふれてみたいと思います。

長崎に新しい町が誕生したのは、約四三〇年前の元亀二年(二五七二)のことで、現在の万才町方面から県庁のある台地の辺りです。大村町、島原町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、分知町のいわゆる岬の六町がこれです。すべて大村氏とかかわりを持つ人々によって建設されました。当



長崎の町のはじまり

時入港してきたポルトガルの人達との貿易と、キリシタンの人々が安住できる町づくりが、其の目的でした。さつそくその年、ポルトガルの貿易船三隻が長崎へやって来ました。これから、港「ナガサキ」の名が世界に広まっていきました。長崎が開港されると、各地から商人達やキリスト教への迫害を逃れたキリシタン達が、相次いでやって来ました。人口の増加に伴って、長崎

商人として有名な大賀九郎右衛門などの活躍が目立っていました。特に、博多商人の活動で注目されることは、当時の内、外商人に対する金融「投銀」で、長崎貿易の中心的な役割を果たしていることです。

このほか、移住してきた博多町人の中から、長崎の町役人になったという人もかなりいるようです。町の長「乙名」にはもちろん、町役人の最上席である町年寄にも博多出身者が多くいました。高島四郎兵衛も其の一人です。町年寄とは現在でいえば市長にも相当する職ですが、世襲制で高島家は江戸末期まで続いています。

また、博多商人が長崎での海外貿易に活躍していた証として、出島町人二十五人衆(出島構築の出資者)の中にも、博多関係の商人として、末次宗徳、大賀九郎右衛門、高島四郎兵衛、堀九郎右衛門等そうそうたる名前がみられることから、長崎と博多との関わりの深さの一端がうかがえます。

ところで、筑後に関係のある町名では、先ず榎津町があげられます。町名は筑後の国、榎津に由来するといわれています。榎津といえば、現在の福岡県大川市です。筑後川の川口にある港町で、家具の産地として有名です。筑後方面の物資はここから積み出されていきましたから、その地の人たちが多数長崎に渡って来たように思われます。それから、その名、ずばりの筑後町が出現します。のち寛文の町制改革で上筑後町と下筑後町に分割されました。このほか筑後に関係のある町として本御座町、新御座町がありました。この両町も寛文の町制改革のとき、本御座町は東中町に編入され、新御座町は、上は炉粕町に、下は八百屋町に編入されました。畳は当時の住居には欠かせないので、其の畳の「ござ」は長崎には出来ないもので、筑後方面から運ばれてきたものです。ござの原料である藁草は今も筑後の特産品の一つです。

また筑後方面から長崎への移住者が多かったことは、長崎における寺院の開基の出身地の多くが、筑後方面であることから推察されます。その寺院を建設順に言いますと、悟真寺(慶長三年)、大音寺(元和三年)、法泉寺(元和七年)、聖徳寺(寛永三年)、観善寺(寛永三年)、光源寺(寛永十四年)などとなっています。

(長崎歴史文化協会理事)

の町は次第に六町の外へ広がっていきましました。六町に次いで、最初にくられた町が博多町でした。当時、九州第一の商都であった博多から多数の商人達の移住があり、新しい博多町の建設が始められました。

その後、外町とよばれる地域に新しく博多町ができた時、前からあったほうを本博多町、新しくできた町は今博多町と呼ばれることになりました。昨年くんちに出場した町がこの今博多町です。このほか、博多に関係のある町に興善町があります。博多の商人末次興善が開いた町です。そして、興善町の後に後興善町ができました。

末次興善は長男の宗徳を博多の店に残し、次男の平蔵を伴って長崎へやって来ました。その平蔵が長崎で大活躍をし、朱印船貿易で莫大な財を築きました。そして、元和五年(一六一九)には前の代官村山等安を失脚させ、外町の代官の座を獲得しました。

その後、末次家は代々代官を世襲し、その富は五、六十万石の大名も及ばないほど大きかったと言われています。しかし、四代目茂朝のとき密貿易が発覚し、財産はすべて没収され、末次家は滅亡してしまいました。

博多からの移住者が特に多かった時期は、天正末年から慶長年間(一五八〇年代〜一六一〇年代)の頃です。長崎の町の発展状況からみれば、六町の町建が第一次とすると、第二次、第三次の町建が進んでいた時期に当たります。大村純忠が一五八〇年イエズス会に寄進した長崎の町を、豊臣秀吉が没収し直轄地にしたのが天正十五年(一五八七)です。この時の長崎の町は十カ町になっていました。それから十年後の慶長二年(一五九七)には二十三カ町に倍増しています。尚この慶長二年から外町の建設が始まりました。

この町数の急増ぶりの背景には、朱印船貿易の盛況があったのです。博多関係の商人としては、末次平蔵を初めとして、博多・黒田藩の御用

風信

○旧暦によると一月より三月までを春とし其の春の中心を二月十六日(望月)としている。昔、西行法師の和歌に「ねがわくば 花のもとにて春しなん その如月(二月)の望月のころ」とある。今年の旧二月十六日は三月十五日となり、お彼岸の入りは三月十八日からである。この頃が一年中で一番うらかな季節であると古人は言っている。

○先日、小学館編集部石丸氏と長崎県商工部宮本女史が来訪され「美味しんぼ」(漫画本)に長崎の戦前の郷土料理の中よりシツポク、長崎雑煮、カステラ汁粉などを取材したので協力して下さいとの依頼を受けた。主旨は「失われつつある食の文化を後世に残すためです」と言われる。勿論「おしみなく協力いたします」と御返事申し上げた。

○三月に入りましたので、本会では毎週月曜朝十時半より開講して参りました「長崎講座」を三月六日(月)より開始いたしました。内容は「旅行ばなし」「シニア向けピアノ教室」「口之津話」などなど多種多様、会費は不要ですが資料代二〇〇円です。座席五十名まで先着順です。

○また本会では、四月より昨年同様月二回(第一・第三火曜日午前中)の古文書解読会を開設します(世話人・宮田修二・米田輝臣・川原清・古賀昭子)会費不要。参加希望者は本会事務局まで(電話八二二一―一五四〇)

○純心大学長崎学研究所より「資料集・第七集」が出版されました。今回は長崎町年寄業師寺家文書、島原実録、長崎来航黒船一件を集録(解説・越中哲也)。中でも島原実録は天草四郎合戦始末が細川藩(熊本)記録を主に記されている。学校の研究書であり書店では販売されぬので希望者は本会事務局まで(電話八二二一―一五四〇)印刷費一、三〇〇円+送料。

○二十六聖人記念館の結城神父より、デコウト光由姫女史の著「ロナルドと千利久・織田信長」を戴く。本の内容は西欧と日本文化のあい、異人と日本女性の愛とロマンの物語であった。(コスミック出版一、八〇〇円)

○四月二十一日は恒例により、延命寺より旧上長崎村お大師様の遺跡めぐりを計画しております。

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一―一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

